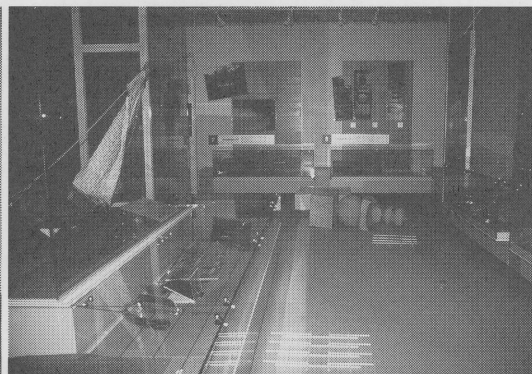


# 西宮市立郷土資料館ニュース 第17号

西宮市立郷土資料館 兵庫県西宮市川添町15番26号 〒662 電話0798-33-1298



西宮市立郷土資料館の被害状況(常設展示室 第3収蔵庫 工作室 1月18日撮影)

## 目次 CONTENTS

兵庫県南部地震による西宮市立郷土資料館の被害状況… 2

鳴尾の一本松とエビス神の伝説について(中) (井阪康二) … 4

# 西宮市立郷土資料館の兵庫県南部地震による被害状況

## 西宮市立郷土資料館

---

西宮市立郷土資料館は、1月17日に発生した兵庫県南部地震によって一部の施設、設備、資料が被害をうけた。本来、当館のような施設は、そこに収蔵されている資料の破損があってはならず、資料の被害報告は館としてたいへんな不名誉である。しかし、早期にこれを報告、公刊することで、今後の当館における資料の保管、展示にフィードバックし、さらに、これまで地震被害のなかった博物館、資料館の地震対策材料になれば、とかがえる。

当館は、市立中央図書館、市民ギャラリーとともに西宮市教育文化センター内に設置されている。鉄骨・鉄筋造地下1階、地上3階建てで、収蔵庫、工作室は地下1階、常設展示室、事務室は1階にもうけられている。建物は壁面に亀裂がはいり、周辺地盤は相対的に15cmほど沈下している箇所がある。当館は、新聞報道からみて、震度7地帯内に位置している。当館の被害状況の詳細は、別表のとおりである。展示室内では、ローケース内における展示資料が、あたかも箒ではかれたように、東北方向にむかって、転倒、集積されていた。ただ、アクリル円筒形の展示台上の土器だけは、転倒することなく移動していた。工作室に7、8段積みあげられていた遺物収納プラスチックコンテナはほとんどたおれて、収納物が混交してしまっていたが、収蔵庫内の鋼製中・重量ラックに2、3段ずつ積みかさねて収納していたコンテナのうち柵から落下したものは、わずかであった。鋼板製で上下分割式の保管庫、集密書架はほとんど転倒したり、いちじるしい歪みを生じたりしている。収蔵庫のコンクリート壁はおびただしい亀裂が生じて、現状では、臭化メチル十酸化エチレンによる収蔵庫燻蒸は、不可能である。

地震被害は、市内の歴史資料、民俗資料を所有していた家家にもおよんだ。当館では、3月末までに、歴史資料保全情報ネットワークの協力をえて、被災家屋からとりだされた歴史資料5件を保管し、民俗資料は連絡をうけた4件について調査し、収集をおこなった。

末尾になったが、お見舞い、激励を頂戴し、館内外の資料保護にご協力をたまわったみなさまにあつくお礼もうしあげる。

場所	対象物	数量	被害状況
工作室	書架	1/1	ゆがみ
工作室	保管庫	4/9	転倒、破損
工作室	埋蔵文化財収納プラスチックコンテナ	70/70	転倒、収納物混交
工作室	パーソナルコンピューター	1/1	モニター転倒、落下
事務室	給湯室食器棚	1/1	転倒、食器ほぼ全損
事務室	事務机	13/13	西に移動(1 m)
事務室	保管庫	9/14	転倒、落下、損壊
事務室	パーソナルコンピューター	1/1	モニター転倒
事務室	ファクシミリ	1/1	転倒、破損
収蔵庫横廊下スプリンクラー	シーリングとの接続部	10/10	破断により漏水
常設展示室主室	五輪塔レプリカ	1/1	転倒、損傷
常設展示室主室	考古資料	164/164	東北方向へ移動、転倒、損傷
常設展示室主室	樽廻船模型	1/1	樽廻船模型転倒
常設展示室主室	天井点検口蓋	3/3	落下
常設展示室主室	壁面グラフィックパネル	43/43	東北方向に移動ズレ
常設展示室主室	名塩紙漉ジオラマ	1/1	レプリカ転倒、壁ズレ
常設展示室主室	歴史資料	65/73	大きく位置ズレ
常設展示室主室	ハイケース内民俗資料	5/17	展示台より落下、損傷
常設展示室主室	ハイケースライティングルーバー	2/8	脱落
常設展示室主室	パネル吊りポール	4/4	ボルトゆるみ、がたつき
常設展示室主室	ランプリフレクター	3/46	落下
常設展示室主室	レプリカ今津燈台ハイケース	1/1	東北方向へ1 m移動
常設展示室主室	ローケース天板ガラス	1/2	脱落した天井点検口蓋で破損
常設展示室前室	監視カメラ	1/1	方向ずれ
常設展示室前室	消火器	1/1	転倒
常設展示室前室	民俗資料	1/19	展示台から落下
常設展示室前室	キャプション立	1/22	転倒、展示台から落下
常設展示室前室	パーティションポール	5/5	転倒
第1、2、3収蔵庫	壁面	—	亀裂
第2収蔵庫	集密書架	1/13	脱線、転倒
第2収蔵庫	集密書架	10/13	ゆがみ
第3収蔵庫	民俗資料(陶器)	5	転倒、破損
第3収蔵庫	プラスチックコンテナ	4/500	棚から落下
燻蒸庫	扉	1/1	(燻蒸時微量ガスもれ)

郷土資料館の被害の概要

# 鳴尾の一本松とエビス神の伝説について(中)

井阪康二(当館館長)

## 3. 鳴尾の沖

尼崎市の大覚寺の十王堂の由来について次のような話がある。「昔、目の見えないお坊さんが、尼崎でとまりました。ある人が(一説には海賊)、お坊さんが大金を持っているのに気付き、雨降りの夜(一説には鳴尾の沖で)お坊さんを殺し、金を奪いました。その後は悪事をせず、奪った金をもとで家は富み栄えました。子供も生まれましたが、目が見えませんでした。(一説には横笛を好んで吹く子だったといえます)。(中略)もう1つの言い伝えでは、横笛を吹いているうちに海に入ってゆくえが知れなくなりました。両親は悲しみのあまり、諸国巡礼にでました。湯殿山に来た時、深夜、横笛を持って子が現れました。親が抱きつこうとしますと、1人の目の見えない人が現れ、子供と親の間を防いで、鳴尾の沖のことを恨むのでした。親は驚いて、自分たちの行いを反省し、十王堂を建てたといえます」(『尼崎の伝説』尼崎市立北部図書館 1991)とある。この由来譚は『摂陽群談』や『摂津名所図会』にも出てくる話である。この話は尼崎の大覚寺の話であるので、賊に襲われたのは尼崎の沖でもいいのに、鳴尾の沖としているのである。

また、大阪市平野にある大念仏寺の亀鉦の由来(『平野郷町誌』平野郷公益会 1931)に次のような話がある。それは、この寺に鳥羽天皇から賜った鉦があった。大念仏寺の中祖法明が播州へ大念仏を弘めるため、難波の津から船に乗った。途中、鳴尾沖で俄かに大波がおこり、鉦は海中へ沈んだ。法明が1か月後に播州より難波へ船で帰る途中に、鳴尾の沖で大亀がこの鉦を背にのせて、法明に返した。それでこの鉦を亀鉦というそうである。この話も鳴尾の沖である。ところで、江戸時代後期に当舎金兵衛が西宮港に大きな船が停泊できるように整備したときに、その工事費の援助を人々に求めるために「西宮築州勧進帳」(『西宮町誌』西宮町 1926)を配った。この勧進帳の中に次のような内容のことが書かれていた。それは、西宮浦は昔より由緒ある港で、万葉集にも歌われている。しかし、それが今は小さな港になってしまっている。兵庫の港より浪速の港までの海上10里の間、船をつなぎ留める港がない。西南の風が激しく吹けば、西宮の沖を通る船は沈んだり壊れたりして、目を被うような惨事になるとある。

このことは、実際にそうであったことが「四井屋久兵衛覚之事」（『西宮市史』第5巻西宮市 1963）に出てくる。それは、享和2年（1802）11月18日、この日は朝から西風が吹きだして、風は次第に強くなった。この日、八幡屋六兵衛の船は急ぎの荷物があったので、船頭と水夫3人が乗って西宮港を出帆した。鳴尾崎近くで風が強くなり、波も高くなり、西宮港へも引き返すこともできず、近くの浜に船を漕ぎよせんとしたが、力及ばず、破船して、船頭と水夫3人は溺死した。また、小網屋の渡海船も大阪へ行く乗船者があったので、八幡屋六兵衛の船と同時に出帆したが、小網屋の船は鳴尾の浦に打ち上げられた。船頭をはじめ乗船者は無事であった。六兵衛の大破した船の船具等は散乱して、浜に打ち上げられたものもあるとある。後に述べる「千両箱を拾った話」も鳴尾の沖で暴風雨にあった海賊船が難破して千両箱が流れ着いたという話である。

どうも西宮から鳴尾にかけては船の往来の難所であったようである。『摂津名所図会』に「難波灘 尼崎大物浦より鳴尾・西宮・打出・五百崎・御田・御影・大石・脇浜・神戸・兵庫までを都て灘目という」とある。当舎金兵衛の「築洲勸進帳」にも見えるように兵庫より浪速の間の海は灘と言われるように、船にとっては難所であったことがうかがえる。

#### 4. 鳴尾浦は有馬浦

『摂陽群談』の瀉の部に鳴尾碕は武庫郡鳴尾村にあり、この碕の水上は有馬郡生瀬川より水は流れて、この碕に流れ着く所である。もっと興味深いのは同書によると有馬浦とは武庫郡鳴尾村の浦をいうとある。そして「南海より潮を引こと、紀伊国熊野権現の冥助を以て也」とある。また熊野と有馬の間は山や里で大きく隔てられているが、鳴尾の沖には横流れの潮筋があり、「これを世に有馬潮を号す」とある。このように有馬の湯は熊野の沖の潮が鳴尾の沖を通り、有馬に湧いて出ているというのである。この有馬の湯筋については、田中久夫氏は芦屋の沖より有馬に通じていると指摘している。おそらく、鳴尾の沖の横流れの潮筋とはこのことをいうのであろう。<sup>(2)</sup>

この有馬潮のことは江戸時代に六甲山系のあちこちで、鉱山開発の計画があったが、そのつど有馬温泉から反対にあい実現しなかった。それは有馬温泉は由緒があり、昔より潮の往来と金銀の精をもって、湯は湧き出していると申し伝えられている。鉱山を掘って、もし有馬潮筋にあたると金銀の精気が衰えて、温泉に差し障りとなり、有馬温泉の衰微は必定であるという理由による反対である。そのことは文化4年（1807）5月に有馬温泉より出された「武庫郡西ノ宮領内鷺林寺村金山御さし留願訴状控」（『西宮市史』第5巻）に、この度西宮領内の山で金山を掘ることは、その所は海辺に近い場所では有馬温泉の辰巳の方

角に当り、わけてもこの方角は有馬潮の筋にあたると思っています。この訳は「熊野沖より西之宮之浜続鳴尾之沖え引取候潮筋哉、有馬之潮申伝へ候義船乗之者共能存知居り罷存候義ニ御座候付」とあり、熊野の沖より鳴尾の沖へ有馬の潮筋が流れていることは船乗りも良く知っているというのである。

『撰陽群談』は鳴尾の沖の横流れの潮筋を有馬潮といい、この流れは文化年間には船乗りも知っていたということは、鳴尾の沖で潮の流れが変わったとを暗示しているのではないだろうか。次にそのことについて触れたい。

#### 5. 鳴尾の一本松の古歌と謡曲「高砂」

『西宮市史』第1巻に鳴尾の松のことが出てくるので長くなるが引用する。「難波の津を出帆して西国へむかう旅人たちが、武庫地方の沖を通るときに、この地の風物をめで、あるいは、有馬の温泉へ入湯にむかって、この地方を詠じた歌がすくなくない。その若干のものをしるそう。源俊瀬は父の死後筑紫から上京するときに、承徳元年(1097)春、なるをを過てはべりける松に松の見えければよめる、羨ましなるをにたてる松ならば／浪かけぬ間もあらましものを、なるをの浜の松は浪のかからず、ぬれぬときもあるが、今の自分は父の死をかなしむ涙のかわくときがない、松がうらやましの意。鳴尾には近世にいたるまで一つ松とって、いまの八幡神社の西南部に一きわ大きな松があり、朝日はその影は須磨の一の谷にうつし、夕日はかげを山崎天王山にうつしたという 平安時代にいう鳴尾の松はそれをいったものらしい。俊頼はまた、なるをに松の木一本立てる なるをなる友なき松のつれつれと／独もくれにたてりける哉(中略)平安時代末、鎌倉時代初期の人慈円には、我が身こそ鳴尾に立てる一つ松／よくもあしくも亦たぐひなし、海辺月 伊賀入道為業の会、浦づたひ鳴尾の松の影に来て／又隈もなき月を見る哉」とある。また高倉天皇が巖島神社へ御幸する途中、鳴尾をとおり「をとにききつるなるおのまつ、ききもならぬなみの音」(『高倉院巖島御幸記』)とあるように、鳴尾の松は都の貴族には知られた存在であった。

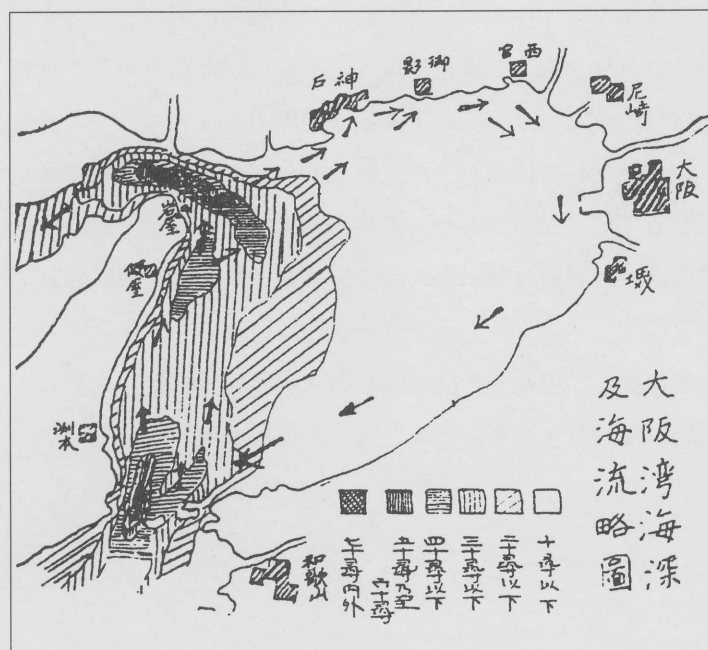
それではどうしてこのように鳴尾の松が注目されたかということである。それをとく鍵は、室町時代前期に世阿弥によって作られた、謡曲「高砂」の1節にある。これは結婚式でよく歌われる下りである。それは

高砂やこの浦舟に帆をあげて、この浦舟に帆をあげて、月もろともに出し潮の、波の淡路の島影や、遠く鳴尾の沖過ぎて、はや住の江に着きにけり、はや住の江に着きにけり

とあり、高砂を舟で出て、遠く鳴尾の沖を過ぎてはや大阪の住吉に着いたというのである。

ここで前章を思い出していただきたい。2章で西宮と淡路の往来があったとふれた。そして、3章では西宮から鳴尾の沖にかけて、海の難所であったと述べた。これらのことから、鳴尾の沖は潮の流れの転換点ではなかったかと思われる。

大阪湾の潮流の流れを『武庫郡誌』第4章第1節の「潮流の方向及速度」に「大阪湾に於ける潮流の最も著しきは、紀伊水道より紀淡海峡を通過して流れ来れる上げ潮なり。此潮流の幹流は、最も中広き由良友ヶ島間より入り来たり、淡路島に沿ひて北流、仮屋浦の辺りにて東北に向かつて一支流を出す。此支流は進みて神戸市葺合の海岸に衝突す。幹流は更に北流して明石海峡に至り、茲にて二派に分れ、一は西して明石海峡を越え、一は須磨町の海岸を洗ひて漸次東す。(中略)此潮流は武庫川口付近より其方向を東南に転じ、淀川口の沖を経て漸次西南に向ひ遂に紀淡海峡に至り、下潮となりて紀伊水道に出づ」とある。



大阪湾の潮流図(『武庫郡誌』より)

武庫川付近にて潮流はその方向を東南に転じている。つまり、謡曲「高砂」の鳴尾の沖すぎではや住の江に着いたという下りは、潮流の方向転換を示しているのである。船で航行する船頭にとっては鳴尾の沖が一つのポイントであたようである。

鳴尾の海岸は松の風光明媚なところであったのである。それはこの章で触れた平安時代や鎌倉時代の和歌から分かるのであるが、それだけでは一つ松の話は出て来ないのである。

舟が鳴尾の沖に来ると、潮の流れが変わり方向転換する場所なので、鳴尾の海岸にあるひととき大きな松が船頭達の目印になったと思われる。これらの条件があって、はじめて鳴尾の一つ松が和歌に歌われ、その伝説ができたのである。

鳴尾の一つ松の伝説についてはこれで答えがでたかと思うが、えびす神の出現がどうして鳴尾の沖なのかを次に考えたい。

#### 6. 鳴尾の浜は物の寄りつく所

大道歳男著『なるお』(1979)に鳴尾の浜で千両箱を拾った話が出ている。それは「笠屋のあたりが波打ち際であったころの話である。この地に住める人、早起きは三文の得なりと、毎朝人より早く海辺に出で、打ち来れる流木を拾うのを日課としていた。たまたま夜来よりの暴風雨の翌朝、いつもより良き流木を拾わんと、より早く家を出かけ海辺に至り行くと流木の中に千両箱あるを見付ける。空箱ならんと持ち上げんとすればずっしりと重き量にて持ちあがらず、持っては休み、休みては持ちてようやく我家に至りて、箱を開きしところ、小判ギッシリと詰りおれり、慌てて押込みに入れて猫ババとしたがその後のことは知れずとか、邑人いまに語り伝えている。この千両箱、暴風雨の夜、なるをの浦を通りし海賊船が難破したものであることが後に分かった次第なり」とある。この話では鳴尾の浜で流木を拾うことを日課としていた人があった。それと鳴尾の沖は暴風で難破する舟があったということと、鳴尾の浜は難破船の物が流れ着くところでもあると理解されていた。

暴風雨のときに鳴尾の沖で船が難破して流れ着く話が2章の「四井屋久兵衛覚之事」でふれた。このように鳴尾の浜は物が流れ着きやすい場所であったようである。

(以下次号)